

「花の街」によるオープニング
オカリナフェスティバル in KOBE 2026

江間章子
團伊玖磨

AC I

AC II

BC

7

13

19

25

な な い ろ の た に

を こ え て な が れ て い く が ぜ の リ ボ

ン わ に な ー つ て わ に な ー つ て か け て

「花の街」によるオープニング

31

36

41

七色の谷を越えて
流れて行く 風のリボン
輪になって 輪になって
かけて行ったよ
春よ春よ
とかけて行ったよ

美しい海を見たよ
あふれていた 花の街よ
輪になって 輪になって
踊っていたよ
春よ春よと
踊っていたよ

すみれ色してた窓で
泣いていたよ 街の角で
輪になって 輪になって
春の夕暮れ
一人さびしく
泣いていたよ

作詞の江間章子は戦後間もない1946年（昭和21年）、「多くの人に夢を与える詩を」と依頼を受けました。その時、頭に浮かんだのが神戸の街でした。

当時、東京は焼け野原でした。江間章子は神戸に行ったことはありませんでしたが、「乙女心に憧れていた港町・神戸は、きっと花が咲き乱れる美しい街に違いない」と想像を膨らませました。目の前にある戦争の悲しみや焦土（がれき）の景色とは対照的に、「日本のどこへ行ってもこうあってほしい」という平和と復興への強い願いが込められています。